ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.19 No.5 May 2018

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

5

CONTENTS

- 巻頭言
  赤ちゃんが一番安全に生まれる国
  ／高見宇造 1
- 「おふでさき」天理言語教学試論～「こと」的世界観への未来像～（49）
  第６章　吉本隆明と『思想のアンソロジー』⑧
  ／井上昭夫 2
- 「元初まりの話」に登場する動物たち（28）
  「ふぐ」について ①
  ／佐藤孝則 3
- 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相（17）
  戦前のハワイ伝道と日系移民社会 ⑦
  ／尾上貴行 4
- 「おふでさき」の標石的用法（33）
  動詞について ⑱
  ／深谷耕治 5
- 「おさしづ」語句の探求（29）
  「おさしづ」第３巻における「本部事情」と「道」
  ／澤井治郎 6
- 現代世界に生きる「人間」と「宗教」―再考―（５）
  アンドロイドは電気羊の夢を見るか？ ①
  ／岡田正彦 7
- 遺跡からのメッセージ（34）
  文化遺産を今に活かす② 国宝・中平銘鉄刀が出土した東大寺山古墳
  ／桑原久男 8
- 天理参考館から（14）
  疱瘡神と赤
  ／幡鎌真理 9
- 図書紹介（104）
  『グリーフケアを身近に』
  ／堀内みどり 10
- 思案・試案・私案
  「～らしさ」志向
  ／森　洋明 11
- English Summary 12
- おやさと研究所ニュース 13
  特別講座「教学と現代」を開催（金子昭）／第 309 回研究報告会（山西弘朗）／第 310 回研究報告会（岩嵜大悟）／平成 30 年度公開教学講座／新刊紹介／『天理教事典 第三版』案内

巻頭言

赤ちゃんが一番安全に生まれる国

おやさと研究所長　高見宇造　*Uzo Takami*

３月 25 日、おやさと研究所では「生命倫理と家族の未来」と題してシンポジウムを開催した。基調講演「生命操作の視点から臓器移植・生殖医療・ゲノム編集を考える」を受けて、討論「生命操作はどこまで認められるか」を行った。多くの意見を拝聴し有意義な会となったが、特に「子どもが授かるものからつくるものになってしまわないか」という指摘には、こうした議論の核心を突くものとして考えさせられた。今号で報告しているのでご一読を願いたい。

ところでこうした生命倫理問題に高い関心が寄せられる一方で、現在生まれてくる新生児の現状にも注目したい。３月には新聞各紙が国連児童基金（ユニセフ）が行った世界の新生児死亡に関する報告「Every Child Alive」（2 月 20 日発表）を取り上げたが、私はこちらも興味深く読ませて頂いた。新生児とは生後４週間までの時期の赤ちゃんのことであるが、報道によると、生まれてから１カ月を生き延びることができない新生児は、世界中で年間約 260 万人にも上る。またその中の約 100 万人は、生まれたその日に亡くなっているという。これが新生児死亡である。

今回の報告では日本の死亡率が最も低く、出生児 1,000 人に対し 0.9 人であり、「日本は赤ちゃんが一番安全に生まれる国」になったと報じている。以下、アイスランドの 1.0 人、シンガポールの 1.1 人と続く。反対に、新生児死亡率が最も高い国はパキスタンで、出生児 1,000 人に対し 45.6 人。続いて中央アフリカ共和国、アフガニスタンと続く。新生児死亡率のワースト 10 カ国の中で８カ国がサハラ以南のアフリカ諸国である。死亡原因の約 80％は早産や出生時の合併症、感染症によるとされる。そこでユニセフは「全ての母親と赤ちゃんが、水や石鹸、電気のある清潔な施設でケアを受けられるようにする」「新生児ケアの経験が豊富な医師や看護師、助産師を十分に確保する」等の提言を行っている。逆に言えば我が国はそうした取り組みが世界で一番進んでいることになる。日本が幸せな国であることに感謝するとともに世界の新生児が救われることを願う。

ところでこの問題を考える時、私たち信仰者は「をびや許し」の守護を思わずにはいられない。「をびや許し」は、「ぢば」より、存命の教祖を通して妊婦に渡される許しもので、安産の守護を保証くだされる。「をびや許しは人間の誕生が親神様のご守護の賜物である証拠にお出し下されているのであります」と言われるが、筆者は過去の統計を調べてみたが興味深い事実が分かった。

平成 28 年、「をびや許し」の下付件数は 5,064 件であった。一方この年、全国の出生児数は 97 万 6,978 人である。また平成 27 年の下付件数は 5,356 件であり、出生児数は 100 万 5,677 人であるから、ここ数年は妊婦約 200 人に１人が戴いたことになる。これは決して小さな数字ではないだろう。

ちなみに過去 10 年の下付件数は平均約 5,700 件、出生児数は平均約 110 万人である。過去、昭和 49 年には 22,063 件の下付があった。同年の出生児数は約 209 万 2,000 人であるから、実に約 95 人に１人の妊婦が戴いたという年もある。信仰者としては、「日本は赤ちゃんが一番安全に生まれる国」になったのは「をびや許し」の賜物であると考えるのはいかがだろうか。「をびや許しはよろづたすけの道あけ」と教えられる。私たち信仰者は世界の新生児死亡の現実を注視しつつも、日本が幸せな国であることに感謝し、「をびや許し」の信仰を世界へ弘げる方途を考えなければならない。